

令和元年5月18日
北関東フォーラム
於：シムックス

**中斎塾 北関東フォーラム
平成31年度 第5回**

10連休が終わりました。充実して過ごした方もおられるでしょうし、時間を持て余した方もおられるでしょう。

5月14日の日経新聞に面白い記事がありました。紙幣の発行高が4月末現在で、114兆5417億円と過去最高になったということです。それだけ国民がお金を使うだろうと想定して、どんどん刷りまくったのでしょう。

対して、皮肉な現象を申しますと、同じく日経新聞の記事(5/13)にありました。今、政府はキャッシュレスを推進しています。クレジットカードやスイカ等のICカードを使ったキャッシュレスの決済比率について40%以上を目指すということですが、それはアメリカやイギリスに追いつけという数字です。現在は日本が18%、中国は60%、韓国は90%だそうです。中国はどんどんアフリカに進出していますから、アフリカの国々もキャッシュレス化が進んでいます。実際に、日本人が中国へ行って屋台で100円くらいの食べ物を買おうと思ったら、現金が使えない。結局タダで貰ったという笑い話があります。それほど世界はキャッシュレス化が進んでいます。

ということで10連休、さて何をしようかと持て余した方もいれば、日銀はせっせとお札を発行し終わってひと休み、サービス業はてんでこ舞い・・・と、同じ10連休でも対応が全然違いますね。

自分の身の周りの事は、体験で分かります。しかし自分が体験する以外のことは、テレビを見たりネットや新聞を見たりして色々な情報を取る必要がありますが、客観的に客観的にと思うと、客観という名前の主観になるから氣をつけた方がよろしい。自分の色眼鏡でしか見えなくなると怖いですね。入ってきた情報を自分で取捨選択し、これは良いとか悪い、これは自分に必要な情報だ、・・・という具合に分ける必要があります。

例えば、私はこのところ万葉集に関して色々な本を買いました。今回の改元に際して、一番上手な売り方をしたのはカドカワソフィア文庫です。令和という元号が決まって直ぐに、梅花の歌の序が掲載された解説本の宣伝をSNSで社員が一気に流しました。それがどんどん拡散されて、大量に売れたようです。

私は八重洲ブックセンターと丸善に行きましたが、どちらも大きな宣伝幕はあるものの実物はそれほど多くありませんでした。特に八重洲ブックセンターは、会社で対応したという感じではなくて、万葉集を扱っている担当者が一所懸命かき集めたのでしょうか、売り切ればかりでした。会社全体で対応している所と、その店ごとに任せている所と、店の担当者に任せている所・・・大型書店といっても時代の波に乗れているかどうかは極端に違うと感じました。

ということで、紹介書籍は角川ソフィア文庫の『新版 万葉集 1』（伊藤博訳注）です。それと、『本当は恐ろしい万葉集－西域から来た皇女』（小林恵子著 祥伝社）、『万葉集とその時代』（松尾光著 笠間書院）です。こちらは「万葉集は歴史的な史料としてどこまで読めるか」という帯が付いています。前回は申しましたが、古事記や日本書紀が表の歴史（権力者側の歴史）を語っているとすれば、万葉集は負けた側の歴史（裏の歴史）を語っているということなので、そういった資料が欲しいと思って購入して読んでみました。

それだけではなく、前回お話した万葉集の講義をしている友人に会って話を聞きました。友人曰く。万葉集は偏った本だそうです。大伴旅人や大伴家持ばかりが沢山載っていて、藤原一族は少ししか出ていない。ただし、天皇陛下から一般庶民に至るまで多くの歌が収められているので、とても良いものだと言っていました。

元号について

本日のテーマ、元号について申します。

今回の令和改元によって、新しい時代が始まったと思っている国民が圧倒的多数です。「令和」が発表された直後、「令和」に関するツイート数が2時間で450万という数字をみても分かります。昨年8月に今上陛下がビデオメッセージで譲位のお気持ちを述べられましたが、その時の新聞の世論調査では、譲位に賛成であると答えた国民が90%を超えていました。それを見て安倍さんは、これはもう譲位をするしかないと思腹の底から思ったでしょう。

令和改元に際して、安倍さんは相当氣を遣っていたと思います。というのは、メディアの報道で生前退位という言葉が出ました。それに対して皇后陛下が「天皇陛下は譲位と申されました。生前退位という報道に接し、大変な衝撃を覚えました」とお答えになったという報道が一瞬出ました。調べてみると、退位とは、「位を退けさせられたまう」と読むのだそうです。つまり、無理やり天皇の位から引き摺り下ろすという意味があります。皇室の長い歴史の中で退位というのは極めて少なく、淳仁天皇は位を剥奪され淡路島に流さ

れました。淡路廢帝と呼ばれ、真偽のほどは定かではありませんが、翌年には毒を盛られて亡くなられたようです。それから仲恭天皇は四歳の時に即位させられて、わずか二ヶ月後に退位されています。ですから皇室の方々にとって生前退位とは、使って欲しくない不吉な言葉であるようです。そういう言葉がマスコミで出たので、美智子皇后は大変な衝撃を覚えたというわけです。天皇陛下も皇后陛下も譲位と言っておられるのに、生前退位とは何事かと思えます。

ちなみに御代替わりについては、「みよがわり」と読みます。新聞等は「代替わり（だいがわり）」と書いています。一般的には「代替わり」が良いと思いますが、皇室には皇室用語がありますから、やはり皇室言葉を使う方が良いと思っています。全国紙で見ると、産経新聞だけが「御代替わり」、「譲位」という言葉を使って、他の新聞は「退位」「即位」という言葉を使っています。産経新聞は「御即位」と「御」を付けていました。

そして今回がチャンスと思ったのでしょうか、新聞社どうしが「産経はコチコチの右寄りだ」とか、「朝日は左寄りだ」と他紙を堂々と批判しています。面白い現象です。しかし、これで日本のメディアも変わって来るかもしれないと感じました。特に3.11以降、世界的に見て日本のメディアに対する評価はガタンと落ちていますから。

今回の御代替わりでつくづく感じたのは、日本という国は本当に特殊な国だということです。特殊な状況を幾つも並べてみれば、それほど他の国と比べて違うのかと感ずるものが沢山あります。その中心にあるのが天皇家なのだと思います。

世界196カ国のうち、皇室（ロイヤルファミリー）のある国は40カ国あります。その中で、ずっと血筋が続いているのは日本だけです。イギリスは途中、王位継承者がいなくなってしまい、ドイツの方を呼んでロイヤルファミリーを継承しました。日本の皇室はずっと男系の血筋が2700年も続いています。これは非常に特殊なことです。

また、元号も非常に特殊なものです。元号はもともと中国でつくられましたが、今は、世界中で元号があるのは日本だけです。日本の元号の始まりは大化の改新の「大化」ですが、「大化」という元号は制定されたけれども使われなかったようです。実際に元号が使われたのは、大宝律令の「大宝」です。以来、元号は天皇陛下が御在位中の区切りとしてずっと続いており、それだけ歴史の重みがあるわけです。そして、今我々が「平成」と聞けばその時代を浮かべることが出来るように、今でも日本の国の中に深く浸透しています。

論語解説

では、論語の解説に参ります。本日は陽貨篇10～12です。

【十】子伯魚し はくぎょに謂いいて曰いわく、女周南なんじ しゅうなんしゅうなん召南まなを為なびたるか。人ひとにして周南しゅうなんしゅうなん召南まなを為なばずんば、其まなれ猶そ正なおしく牆ただに面かきして立めんつがごときかと。

伯魚は、孔子が20歳の頃に生まれた息子です。

孔子が伯魚に向かって言いました。「お前は『詩経』の周南と召南の章を習ったか。周南と召南には特に人倫の道（人情と道理）が入っているから、それを学ばなければ壁に向かって立っているようなものだ。」

天下を治める道を身につけるには、詩経の周南と召南をしっかりと学びなさいと言っています。やはり、息子に対しては少し違ったことを教えようということだと思えます。

【十一】子曰しいわく、礼れいと云いい礼れいと云いう、玉ぎよくはく帛いを云いわんや。楽がくと云いい楽がくと云いう、鍾しょうこ鼓いを云いわんや。

孔子が言うには、礼だ礼だとやかましく言っても、玉や絹の貴重なものを身にまとっているばかりが礼ではない。楽だ楽だと言っても、鐘や太鼓を叩いているばかりではだめだ。

・・・礼楽の元の精神に立ち返らなければいけないと言っています。

何事も本質が大事だということです。物事は、何故？何故？・・・を追及しなければいけません。今回の改元にしても、憲法に照らしてどうこう等と色々言い過ぎます。本質を考えたらよいと思えます。

【十二】子曰しいわく、色いろはげ厲うちやわらしくして、内こ荏しょうじんかなるは、諸たとれを小そ人に譬なうれば、其なれ猶おせん穿ゆ窬とうの盜とうのごときか。

孔子が言うには、顔つきはいかめしく厳かだが、心の中は柔弱で役に立たない。これを小人に譬えれば、こそどろのようなものだ。

政治家がこういう論語を見た瞬間に、<はて、自分のことではないか・・・？> と思うくらい頭が回ってくれればたいしたものです。北方領土の戦争発言で維新の会を除名された若い衆議院議員も、自分では正論を言っているつもりなのでしょうが、少しは歴史を勉強しろ！ と思えます。

皇室の存在

今回の御代替わりは、知らず知らずのうちに日本のことを考えさせられる流れになっていると思います。そうしますと、皇室の存在が日本の国に与えている影響はかなりあると思います。

例えば、「令和」は日本最古の歌集である万葉集からとられています。天皇陛下・皇后陛下が歌を詠まれることは、ごく当たり前で皇室の伝統として継承されています。もし天皇陛下・皇后陛下が歌を詠むことがなければ、これほど日本国中に詩（うた）が広がることはなかったと思います。

ちなみに万葉集の原文は全部、漢字で書かれています。表音文字と言って、意味は関係なく、どう発音するかだけです。日本という国は中国から漢字を取り入れて、漢字から平仮名が生まれ、片仮名が生まれ、ローマ字が生まれました。日本語には、一つの文章の中に漢字や平仮名も片仮名もローマ字も入れてしまう寛容さがあります。こういう言語は珍しいわけです。他の言語は、英語なら英語だけ一つの文字でしか表させないし、表せない。ですから視点としては一つのものだけになります。

日本という国は、他国の文化を受け入れて咀嚼し、自分の国に合うように作り変えていく能力を持っているので、それが日本語によく顕われています。

日本人の感性は、皇室の方が歌を詠まれるところに、知らず知らずのうちに感化されてきている気が致します。そう思っていましたら、5/14の読売新聞にこういう歌を見つけました。

「散りぬべき 時知りてこそ 世の中の 花も花なれ 人も人なれ」

人も花も散り時を心得て、散るべき時にこそ散る。今が私の散り時であろう・・・細川ガラシャの辞世の句だそうです。石田光成が細川家の屋敷を包囲し、夫人に人質になることを要求しましたが、ガラシャ夫人は拒否。この句を詠んで、（キリスト教は自殺を禁じているから）老臣に自らを討たせて亡くなりました。石田光成はこれ以降、人質をとるのをためらうようになったという歴史があります。自分がいざ死ぬという時にこういう歌が自然と出て来る。そして、これを後世に残そうという意志が明確に見えます。

天皇陛下が作られた歌は「御製（ぎよせい）」、皇后陛下は「御歌（みうた）」と呼びます。美智子上皇后が詠まれた御歌を一つ御紹介します。ハンセン病の患者の療養施設を訪問された時に詠まれた歌です。

「めしひつつ住む人多きこの園に 風運びこよ木の香花の香」

現在、新聞や雑誌等には俳句や川柳、漢詩等が盛んに投稿されています。日本人が自然と歌に馴染んでいるのは、皇室の方々が事あるごとに和歌を詠み続けて来られたからだと思います。日本には素晴らしい歌人・俳人が沢山生まれています、その源は日本の歴史と伝統であり、日本の歴史と伝統の源を探ると皇室の存在であろうと思ひ至りました。

<ここで、猪瀬相談役が上皇后陛下が平成になって間もなく詠まれた御歌を紹介>

(猪瀬) 天皇陛下は国民のことをいつも考えておられると感じたのでご紹介します。

「ともどもに平らけき代を築かむと 諸人のことば国うちに充つ」

天皇陛下が在位三十年記念式典で述べられたおことばの中で、この御歌を紹介されました。国民と共に平和な世を作り上げたいと願って過ごして来た。日本国内に平和を願う言葉が国中に満ち満ちて、国中が一つになって平和が続いた平成の時代。何と有難い時代だったことだろう・・・という感慨を述べられたのだと感じました。

仁徳天皇の「民のかまど」の話があります。仁徳天皇が高台から眺めて、人家の竈の煙が立たないのを見て、国民が貧しい生活をしているのだと気づいた。そこでむこう3年間、年貢をとってはいけないとお触れを出しました。その間にお住まいの宮殿は荒れて、壁は崩れ、雨漏りもするようになってしまった。3年経って、竈の煙が立ち上るようになり、皇后はそろそろ年貢をとってはどうかと進言するけれども、まだ年貢をとろうとしませんでした。更に3年経って、ようやく宮殿を修繕する時には、多くの国民が勤労奉仕に駆けつけて、あっという間に宮殿が出来上がったという逸話です。

その頃から、天皇が国民を慈しみ、国民が天皇を敬愛するという関係がずっと続いているのではないのでしょうか。そこら辺が他の国々と全然違うなと感じます。

ちなみに、外国には「天皇」という言葉のきちんとした訳語がありません。今まで「エンペラー」という言い方をしていますが、アメリカやヨーロッパの国々の感覚から言うと、国民から搾取して自分たちだけ栄耀栄華をしていくというイメージが刷り込まれているのがエンペラーです。ですから、日本の天皇はエンペラーではありません。

世界の平和を祈るという役割において、宗教の視点でローマ法王が一番近いと言われますが、ローマ法王は汚職にまみれやすいポストですし、血筋は関係ありません。そこら辺がまるで違います。尚且つ、ローマ法王はバチカンという小さい国の元首です。政治的・行政的な絶大な権限を持っているのが元首であって、日本の天皇は元首ではありません。

日本を研究した外国人の学者で、日本語のまま「MIKADO (みかど)」という言い

方をした人がいます。エンペラーでもない、元首でもない、ローマ法王でもない、それらを全部まとめた上に立つものが日本の帝（みかど）なのだと思います。

戦後、昭和天皇がアメリカに初めて行かれた時、アメリカ国民は、ナチスのヒットラーに匹敵する最大の悪人という感覚で迎えたわけです。それが、昭和天皇が発した言葉で、アメリカ国民の考えがガラッと変わった。「私が最も悲しみとする不幸な戦争が終わり、私は日本を代表してアメリカの皆様方に感謝の言葉を申し上げたいと思います」と、餓死寸前になった日本国民のためにアメリカが食糧を送ってくれたことに対する感謝の言葉を発したことによって、日本の天皇はエンペラーではないのだという認識が広がったわけです。

これからオリンピック等で沢山外国の人が日本にやって来ます。その人達に日本の国の文化や歴史がすらすらと説明できると良いですね。私は、「伊勢神宮にお行きなさい」と勧めます。伊勢神宮に行くと日本の心が体験できます。

他にも、目で見せることも必要だろうと思っています。オバマ前大統領が初来日した際、天皇皇后両陛下に深々と頭を下げて挨拶をしたことが、国辱ものだとアメリカで大変な騒ぎになりました。一つひとつの動作に、ずっと続いている文化が見えます。オバマさんはお辞儀の仕方を練習しておけばよかったですでしょう。

日本人は、立ち居振る舞いの中に美を感じる民族です。所作を道として心を磨きます。それも日本独特の伝統文化の一つだと思います。所作・立ち居振る舞いが無意識のうちに洗練されてくると、はっと思うような感激・感動を相手に与えることになります。お互い一つでも、そういう所作を身に付けたいものです。

お時間が少なくなりました。最後に、「令和」決定の経緯を少し申し上げておきましょう。私は二松学舎を出ておりますので、二松学舎の視点で申します。

二松学舎の大学院を出た尼子さんという方が、今回、官邸側で元号の考案者を誰にするか、出て来た元号の選定を進めていく担当者でした。今回の元号案については、十数年前から学者の先生方に頼んであったようです。

その内のお一人、石川忠久先生は13案出しました。その中で、「和をもって貴しとなす」から「和貴」という案が石川先生の案の中では筆頭に位置付けられたようですが、しかし政府が最終案に残したのは、「万和」でした。

安倍さんは最初から考えがあって、室町時代以前の日本古典から選ぶと決めていたようです。日本の古典からとるといっても、従来の漢籍も選ばないわけにはいきませんから、

結果的に最終元号案は半分ずつ3:3になりました。それも4月1日寸前までは、官邸側では4人しか元号の進捗状況が分からなかったようです。

3月22日に安倍さんの所に元号案が提出されますが、その中に安倍さんの気に入ったものがなかったので、考案者に再度元号案を出してもらった。27日に出て来た案の中に「令和」があって、これが良いということになり、最終案にギリギリで滑り込ませたようです。27日に決めて、4月1日には有識者会議が開かれましたが、その時の政府の説明が「令和」に関して一番長かったので、周りが忖度をして9名の内7名が「令和」を選んだというわけです。その後、衆参両院の正副議長、全閣僚会議で意見を聞いて、最後に安倍首相が決定するという流れになりました。ですから出来レースだと思いました。

ちなみに、令和の考案者と言われる中西進先生も二松学舎で教えておられました。中斎塾フォーラムの顧問の石川忠久先生は二松学舎の元学長です。平成の元号の考案者と言われる安岡正篤先生も二松学舎の元顧問です。宇野精一先生も二松学舎で教えておられました。宇野先生は平成の元号決定の際に「正化」という元号案を出しておられます。ということで、二松学舎は元号に係わった方が沢山おられますのでご紹介致しました。

お時間になりました。本日の講話を終了致します。